



「さわたりー」という声に振り向くと、道路の向こうで笑顔満開のオーモリが両手をブンブン振り回していた。

バレンタインデーからこっち、オーモリはあの調子だ。

二月十四日、学校で盛大にバラ撒いたチョコレートクッキーが一個余った。そこにたまたま通りがかった小太りな男子が、セロハンとリボンでラッピングした余りものを物欲しそうに見るもんで、つい、「欲しい?」といってしまったら「欲しい」と素直にうなずいたので、ハート型のクッキーをあげた。

それだけのことなのに、オーモリは手作りクッキーを胸に押し当て瞳をうるると湿らせていた。

「よろこんでるねー、すぐく」

おもわずつぶやいてしまったあたしに、

「あいつ、バレンタインのお菓子もらったの、生まれてはじめてなんだよ、おかあさん以外から」と教えてくれたのはミカちゃんだった。

「ってゆーか、なんでオーモリ? もっとマシな男子、いっぱいいるのに」

「えーと」あたしは曖昧に笑った。「いきおい?」

ミカちゃんはあきれたように首をすくめた。

「まあ、相手がオーモリならセーフだけだね。コモリの方だったら大変なことになるとこだった」